

京都の大仏—その数奇な運命—

京都にも巨大な大仏が鎮座していました。天正16年（1588）に、豊臣秀吉が建立に着手した「天下泰平」祈願の寺（方広寺）の大仏です。文禄4年（1595）9月には大仏殿落慶供養が行われました。6丈3尺（約19m）の木造大仏座像も安置される予定でしたが、開眼供養直前の文禄5年閏7月13日、大地震で大破してしまいました。秀吉の遺志をついだ秀頼が復興を命じ、再建が始まりましたが、慶長7年（1602）12月、鑄造中金銅大仏から出火して焼失、慶長13年から三度目のチャレンジとなりました。慶長19年には金銅大仏も大仏殿も梵鐘も完成、いよいよ8月3日が開眼供養の日と決まりました。しかし、その7月26日、家康が突然延期を命じました。棟札と鐘の銘文のなかに不吉な文辞があるという、「国家安康、君臣豊楽」の鐘銘事件です。その後、開眼供養を終えないままに、大仏と大仏殿は東山にとり残され、京都名所の一つとなりました。つぎの災難は寛文2年（1662）にやってきました。この年の5月1日に地震で大仏の肩の部分がさけてしまいました。寛文7年、こわれた金銅仏はとがされて寛永通宝となり、代わりに木造仏がつくられました。寛政10年（1798）、こんどは落雷でした。7月1日夜の落雷で出火、大仏・大仏殿ともに焼失。天保2年（1831）になって、尾張の国の有志が上半身のみの木像（高さ約2m）をつくり、仮堂に安置しました。しかし、昭和48年（1973）3月27日の夜、またまた火事で焼失。400年のあいだに地震が2回、火災が2回、落雷1回、そして家康の横槍と、京都大仏の運命はまったく数奇としか言いようがないように思われます。

（京都府の歴史より）

大仏殿跡緑地



付近標識



大仏殿石垣の遺構